

図書館だより

'82. 12

目次

国文学研究資料への道

伊藤 敬…… 1

ほんとうとしと

本田錦一郎…… 3

曾根田教子…… 4

資料紹介……… 5

図書館をあなたのものに

レポート論文作成のために

山田 次良…… 6

石崎 優子…… 7

調査・案内カウンター最近の

質問から……… 9

購入希望図書……… 10

私の中の賢治さん

石田 瑞枝…… 11

ぶらうじんぐる〜む

林 裕子…… 12

森谷奈穂子…… 13

NEWS …… 14

国文学研究資料への道

伊藤 敬 (国文学)

この10月8日、東京は朝から雨だった。一瞬息情の思いが念頭をかすめたが、あとの悔をと、殊勝にも水道橋のホテルの玄関先で傘を開いた。品川区の戸越銀座の商店街を数丁それた所に、国立の「国文学研究資料館」といういかめしい名の建物がある。旧三井系のある財閥の敷地跡とかで、蓮の花咲く池もあり、閑静な所である。

今、国文学科1年の学生と一緒に『増鏡』を読んでいる。承久の変の後鳥羽上皇と元弘の変の後醍醐天皇の隠岐配流を首尾におくこの作品は、擬古文の名調子もあって、戦前の学生には懐しい歴史物語である。しかし、その享受の歴史に比して、研究面では大きく立ち遅れている。改めて学生と読み直すことで、何かを読み出せたらというのが、この作品を選んだ意図だった。

文学研究は「文字」を相手とするのが本務だから、作品の本文ほんもんが違えば、方向がずれる。増鏡の伝本は、やっかいなことに、大差のある17巻と19巻本とに分かれる。どちらが増鏡の原態なのかいまだ定説がない。これら諸本の比較が最重要である。そこで、はたと当惑するのが、北海道である。

19巻本のもっとも古い写本は、東京駒場の前田育徳会「尊経閣文庫」にある。これは102代後花園天皇の父君貞成(後崇光院、1372~1456)宸筆本(20冊)で、500年以上も前の、保存のよい貴重な本である。以前に二度ほど手にとって調べたことがある。しかしその時は問題意識も浅く、調査ノートも不備で、今の要求に応じてくれない。今回上京の機にと思ったが、その後に貴重書

の閲覧には特別許可がいることになった。その煩を避けて、他の伝本でもと安易に選んだのが、資料館への雨の道となったのであった。

資料館は、国文学関係資料（江戸期以前）の調査収集・閲覧を目的として、昭和47年5月に設立された。この10年間で、海外も含めて約8万点の文献調査を終え、そのマイクロフィルムや複写紙焼き本が閲覧研究の用に供されている（まだ目標の10分の1、百年の大計とはこのこととのこと）。増鏡の諸本は既に収集された中に10数部あった。その半ばは、最近藤女子大学図書館でも購入した江戸期の板本（大鏡・水鏡と合せて23冊、9万円余）と同じものなのでざっと見て終わったが、残る数部の古写本を見ていくうちに、あっと体が熱くなった。

京都の上賀茂、別雷神社内に「三手文庫」というのがある。この文庫所蔵本の奥書に、この写本は、上記の、後崇光院宸筆本を写したという記述がある。そして、もっとも知りたかった後崇光院の傍注もそのまま書きこまれている。以前の私のノートの意味もこれで明らかとなった。私は、手を組み、朝の決意に感謝した。

ところで、こう書いてきたのは、つまらぬひとり喜びの披露のためではない。京都の上賀茂や東京の駒場に行く必要をなくしてくれた資料館を紹介しようとしてのことである。一つの図書館や文庫では、おそらく多くても2、3部の増鏡を蔵するに過ぎまい。フィルムや紙焼き本

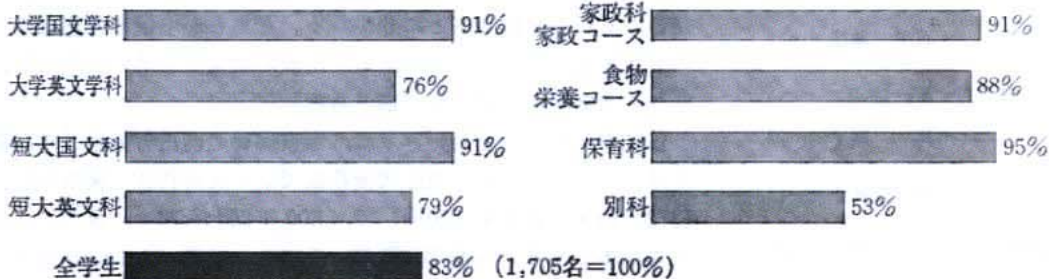
の代用品ではあっても、一度に10数部を手許において比較検討のできることは、これはまさに便利の限りである。さらに言えば、昨今の雑誌・紀要、参考図書も充実している。やがて国文学研究の最大の拠点となるであろう。藤の学生の利用も大いに期待しての紹介であった。

こうした文献調査のため、各地に調査員がいる。私も過去に数年その任に当った。胆振と石狩の両伊達家、函館市立図書館、津軽の海を渡っての八戸市立図書館などへの、楽しい訪書旅行があった。それぞれの古書・古写本の肌ざわりは、今も忘れがたい。思いは遠くに飛ぶ。しかし思いに遊ぶのをやめて現実にもどると、今年もまたお手伝いすることになったが、調査場所は旅費不要の藤女子大学図書館である。これは、国家財政逼迫によるあおり。遠出の楽しみを奪った人々への憎しみは大きい。

しかし、実は喜びが二つある。一つはこの大学の古文書がやがて写真にとられて、東京で多くの人々に広く利用されるであろうこと、一つは、この調査はわずかに半日ですむだろうという、労力軽減からくるもの。それをせめてもの慰みとしている。



貸出登録者数（学科別）1981年度



ほんとうわたしと

本を旅する

本 田 錦一郎 (英文学 非常勤講師)



のっけから仰山な言い方が、本との出会いを語ることは、私にとって、今までの人生の大部分を語ることになるだろう。ということは、私の実人生が、いかに貧弱で、起伏のすくない平坦な道であったかの証明にもなりかねない。しかし、たぶん、その通りだと思う。

少年時代をはぐくんでくれたなつかしい本の数々は、昭和20年3月の東京爆撃ですべて灰燼に帰したが、家庭でも、研究室でも、いま、私の生活するところ、本のころがっていない空間はない。本は、私の狭い書斎や大学の研究室からたちまちはみだし、茶の間を侵略するや、遂に、東京に遊学する二人の子供の空き部屋まで侵しかけているのが現状である。数えてみる気にもなれない、その本の山に、私は、一体、何を求め、何を問い、何を生きたか。私の人生とは、そもそも、何であったのか——。そんなことを、近頃、しきりと思うようになった。(ああ、人生の黄昏か)。

☆ ☆

なんの目的もなく、ただひたすら楽しいがゆえに耽読したヴァン・ダインやクリスティ、そしてジョゼフィン・ティラの推理小説。文学少年気取りで読みあさった藤村や漱石らの近代日本文学。赤エンピツでしるしをつけながら、そのストーリーよりも、作中人物の思想を追ったドストエフスキーやトルストイらの文学。やがて、おきまりの哲学青年時代の到来。敗戦のみじめな生活のなかでも、ひるむことのなかった旺盛な読書欲がなつかしまれる。岩波の哲学叢書を片っぱしから読みあさり、リップスの倫理学に、ヘーゲルの歴史哲学に、あるいは、西田幾太郎や阿部次郎らの思想に、いわば、「酩酊」したのもこの時代であった。

なぜか、あの貧しい時代とは裏腹に、マルクスらの唯物的思想を敬遠し、もっぱら、観念的思考に傾斜していった自分が興味深い。そして、キェルケゴールからニーチェ、ハイデッガーと実存の世界をさまよひ、あげくは、当時(昭和22年頃)出版されたサルトルの翻訳小説にとびついて、再び文学へ。想えば、その間、最終的な目標を日本文学の古典研究にすえて、能勢朝次さんの「源氏」や佐成謙太郎氏の「劇文学」などの講義に深い関心をよせていたのも、他人には奇妙な現象に映ったかもしれない。

戦争のためとはいえ、周辺にあまりにも多くの死を見た私が、生き残ったのをさいわいに腰を据えて、(いささか思いあがっていたきらいはあるが)、私なりに新しい日本文学研究のメトードを設定すべく、ヨーロッパの最先端に行く批評意識を、このさい、しっかりと身につけたいと願っていたのも事実であった。

大学で英文学を専攻し、批評家としてのT. S. エリオットに直線的に向ったのは、この動機に発する。しかし、私の人生は、ここで狂ってしまうことになる。

☆ ☆

その読書は、当初の無目的な悦楽を喪失し、研究という名の手段となり、エリオットは、私に、日本文学への回帰を不可能にするほどの長い旅路を要求した。英国17世紀の形而上派からミルトンへ、フランス象徴派からイマジスト運動へ、そして、ダンテから聖トマス・アクィナスへと、暗く深い森の迷路の放浪はつづく。この行方を知らぬ旅を、どのへんできりあげ、統合の機会をうかがうべきか。〈時よ、静かに歩め〉といまはひたすら願うばかりである。

植物と神話

曾根田 敦子 (学生課)

読書にも教養としての読書と、消費・快楽としての読書という2つの傾向に分けられるというのを何かで読んだことがある。一口に読書と言っても、人それぞれ様々な本との出会いがあり、その人なりの楽しみ方もあるだろう。目的を持って本を読むのも一つの方法だが、なにげなく手に取った1冊の本から、いままで自分とはさして縁のなかった世界に接して、思いがけず楽しい時を過ごすというのも読書の喜びの一つだと思う。

偶然手にした『植物と神話』もそんな一冊だった。各々の植物についての解説と、その植物にまつわる神話・民話・伝説等を集めたその本は、植物にも神話にもあまり詳しくない私にとって、花の名の由来一つにしても知らぬことが多かった。スマイルは大工道具の墨入れに似ているところから名がついたとか。ツバキの呼名は「艶葉木」の意味であるなどは、字を見てなるほどと思う始末である。

一般に西洋にはロマンチックな話が多く、イヴの流した涙より咲いた花(白百合)とか、睡気を催し天から足を迂らせた星が地上で一輪草になった話など。東洋には特に中国にはユーモラスな話が残っている。昔中国に道術に長けた夫婦がいて、日頃の腕自慢が高じてとうとう互いに桃の木に術をかけて喧嘩がはじまった。一進一退を繰り返し、なかなか勝負が決まらなかったこの夫婦喧嘩、最後に勝ったのはやはり夫人の方であった。それ以後、逃げ出した夫の桃の木にはそれまでの桃色の花ではなく、白い花(白旗掲げたわけでもあるまいが)しか咲かなくなったという落がついている。

植物の精というのは、概して見目麗しい乙女が多いものだが、江西省(中国)の洋琴の名手のところへ、その音に聞き惚れてたびたびやっ

て来るボンカンの精は、赤い腹掛けをしたまるまると太った坊やで、飛ぶような浮き浮きした足どりで、皿いっぱいボンカンを盛ってやって来るのだ。この話の中で坊やが住みつくことになる地域のボンカンが、とりわけ美味であるところから生まれた話らしい。

いろいろな話の中には、薬用・食用はじめ人間の生活に役立つ植物の話も多く伝えられている。アイヌの神話には、自分達のまだ知られていない有用性(食用になる)をPRするため、その植物が人間に化けていま流に言えば全国キャンペーンの旅に出る話がある。逆に有害な植物による幻覚症状のため、一家の主が家人をことごとく殺害してしまう話のように、中国の昔話というより最近の三面記事を勢鬨とさせるものもある。

こうした様々な話の中で、一見荒唐無稽と思われようなものの中にも、それぞれの民族の風土、宗教などを象徴的に表わし意味するものがあるのだろうが、こちらにそれだけの知識がないため理解が不十分だった話もあると思う。同じ植物でも、地域により異なるとらえられ方をしている話もあれば、同じようなパターンの話が残っていたり様々であるが、昔の人々の草花に対する知恵・感謝・愛情などをしのばせてくれるのは共通である。そこには、植物(自然)から恩恵を受け、一輪の花にも慰めを見出し出てきた人間の姿が、いみじくも映し出されているような気がする。



資料紹介

The Yellow Book と The Savoy

19世紀末の世紀末芸術を代表するオーブリー・ビアズリー、彼が描く黒と白の世界は見る人に不思議な印象を与える。彼は日本の版画、特に歌麿を好んだといわれ、日本でも雑誌「白樺」にはやくから紹介されている。彼は25才でフランスで病死するまでのその短い生涯において、世紀末時代を象徴する芸術至上主義を最も強く表現している当時の雑誌、2誌の創刊に深く関係している。その2誌とは、ここに紹介する **The Yellow Book** と **The Savoy** である。

ビアズリーは、これら雑誌に関係するまでにトマス・マロリーの「アーサー王の死」の挿絵や、オスカー・ワイルドの「サロメ」の挿絵によって挿絵画家としての名声を得ていた、が当時のヴィクトリア朝の時代風潮と彼が描くところの独創的な画風が相容れないものであったためもっと自由な発表の場を必要としていた。そのためアメリカの作家ヘンリー・ハーランドが文学部門を、ビアズリーが美術部門を担当した新しい雑誌 **The Yellow Book** が1894年4月に創刊されることとなった。

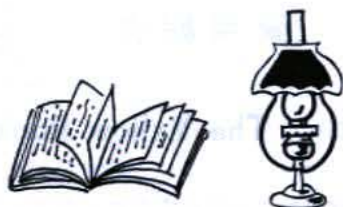
季刊誌で雑誌というより本の形態をとり、表紙は名のとおり黄色で、一般的に不道徳で頹廢的なフランスの小説から体裁、誌名をとったとも、また、ロンドンの霧—黄色い濃い霧—を表示しているとも、いろいろいわれている。現在では世紀末芸術の代表とみなされている

この雑誌も、はじめは何ら新しい主義を起そうとの意図もなく、当時の英国の文化的な仕事を代表するものとして出発した。寄稿者には当時の一流作家といわれていたH. ジェイムズや、J. ディヴィッドソン、A. シモンズ、E. ドウソン等がいた。また、H. G. ウェルズやA. ベネット等、若手作家の活躍の場でもあった。雑誌は1897年4月まで全13巻発行されたが、ビアズリー自身は、O. ワイルドの裁判事件により5巻からは全く姿を消している。その後再び、今度はアーサー・シモンズと共に新しい雑誌 **The Savoy** を創刊した。**The Savoy** は1896年1月創刊で、最初は季刊で、後、月刊となり、同年12月まで全8巻発行された。この雑誌の寄稿者も前記 **The Yellow Book** の作家達が多かった。他にW. B. イエーツ、G. B. ショー等の名もみえる。ビアズリー自身も挿絵だけでなく、「三人の音楽家」、「理髪師の唄」の詩や、未完の散文物語「丘の麓」を発表している。彼の健康上の理由等でこの雑誌もすぐ廃刊となった。2誌とも、共に短命ではあったが、この時代に与えた影響は大きなものであったといわれている。

最近あいついで図書館にこの2誌が購入された。**The Yellow Book** はAMS Press (1967)の複製版で、黄色の厚地の表紙で背には黒でタイトルが入り全13巻、**The Savoy** は、1896年に発行されたもので紺地に金色でビアズリーの絵がほどこされ、ハードカバーの3冊の合本となっている。各々のなかの作品はもちろんのこと、ビアズリーの挿絵を眺め、一時世紀末の唯美的な雰囲気浸ってみるのも楽しいことではないだろうか。参考としてS. ワイントラウプ著の伝記「ビアズリー」(美術出版社 1969) [723-B31w] 等もあわせて目を通すとより興味深いであろう。



図書館をあなたのものに レポート論文作成のために



実験とレポート

—それから何を学ばよいか—

山田 次良 (栄養学)

学問で最も大切なことは自分で考えることであろう。したがって大学では自分で考える訓練をする。あることについて考える前に知識が必要であることは、英文を読むのに単語を全く知らないのではどうにもならないのと同じことである。しかし知識を得ることは最終目的ではなく手段である。

レポートは自分の考え方や考えたことを他人に伝えるために書くのであるから、読む人にわかるように書かなければならない。特に何を読む人に伝えたいのか、自分の意図が伝わるように書く必要がある。例えば実験を非常にうまく行うことが出来たことを伝えなければそのように書く。本を一生懸命調べたことを伝えなければ、それが伝わるように書く。私は実験の内容をいかに理解したかが最も重要だと考えているので、実験で行ったことや本で調べたことを学生自身がどのように理解したかがわかるように書いてほしいと思っている。

理科系の文章は内容が明確でなければならない。そのためには事実と意見を区別すること、記述の順序を論理的に組立てることが必要である。実験科学の研究報告は通常(1)実験の目的、(2)実験方法、(3)実験結果、(4)結果から導かれる結論、(5)考察、(6)参考文献、のような順序で論理が組立てられる。(必ずしもこの順序で記述されるとは限らないが、この順序で読めば理解出来るように書かれている。) 学生実験のレポートも原則的には同じことである。

一言で学生実験と言ってもその目的にはいろいろな場合があり、それによってレポートの書

き方にも若干の差がある。ここでは講義で学んだ内容を実験を通して実感(体験)として理解することを目的として行われる実験について述べる。

学生に課題として与えられた実験は当初から狭義の実験目的は明らかであるが、学生自身が目的を正しく理解することが必要なので、レポートには実験の目的を明確に書く方がよい。ここで言う実験の目的とは、ある物の量を測定するというような狭義の目的ではなく、それを測定して何を理解しようとするのかという広い意味でのことである。

実験方法は詳述されたプリント等が与えられている時は繰返して書く必要はない。ただし後日参考にすることを考えて、返却されたレポートにプリントを添付しておくことよい。

実験結果は出来るだけ詳しく書くべきである。研究論文では途中の経過は記載せず結果のみを述べることが多いが、学生実験レポートでは研究者が実験ノートに記しておく内容、すなわち実際に観察した細かい点についても記載してほしい。一回限りの実験では誤った結果を得ることがある。誤った結果であっても自分の観察したことは観察した通りに記載すべきであるが、実験の目的が講義で学んだ内容の理解にあるので、誤った結果をそのまま記憶されては困る。そのため担当者はなぜそのような誤りが生じたのかを推論し、正しい結果を学生に伝えたいと考える。正しい推論を行うために詳しい途中経過の記載が役立つ。また途中の変化についても正しい場合にどうなるかを伝える必要がある。

実験結果から何が結論され、何が理解できたかは実験目的の項と呼応して重要である。もしもレポートが学生の理解度の評価に用いられるとすればこの点が最も重視されるであろう。

実験結果から得られる結論と考察は必ずしも項を分けない。結論を出すことが一種の考察でもある。それはともかくとして、考察の項が図書館と関係する部分である。

学生のレポートには参考書で何を調べたらよいかに苦勞しているものをしばしば見受ける。参考書ではレポートを書く際に生じた疑問について調べるのである。逆に本から疑問を見つけ出そうとしてもそれは難しい。講義で学んだ内容を実験を通して理解するという実験目的に立

返って、実験の内容と講義あるいは教科書の内容との関係を整理することから出発するとよい。その時もう少し詳しい知識が必要となればやや専門的な本を図書館で調べることになる。実験は一つの方法、一つの方法でしか行わないから、関連した方法、他の材料の場合どうするか、などを調べるのも知識を広げることになる。

実験レポートを通して講義の内容をより深く理解し、自分で考え、自分で判断する習慣を身につけてほしいと思う。

レポートを読んで考えること

石崎 璣子 (保育学)

心理学を受講する学生に対して、個々人がテーマ設定をしたレポートの提出を課している。

学生は6月と7月の間に、手に取って開いた文献名と目に留った文章との記録用紙を集積する。この期間は、これと言った意図もなく、ただ手当たり次第に作業が進められるので、図書館通いが強いられるだけで、果たしてレポートにまとまるものかどうかと不安の中にいる。ところが記録してきた内容を並べ眺めると、そこには計画的に集めたものではないのに一連のつながりがあり、*「我は……」*のことに興味を持っていた。と、自分ながら考えさせられ、レポートのテーマがひとりで決めてくる。そうして取り上げたテーマの底を支えているのは、日頃漠然と思いついていた自分自身なので、続く作業は苦勞を感ずることなく進んでいく。知識が増えて満足感を覚え、また疑問に思っていたことが文献の中で解決する時には確信をいただいて自分が強くなったように思えるものである。9月中旬の提出の頃には、広大な土地の一部を耕したにすぎないことが見えてきて、目前に展開する考えの深みに引かれる思いでレポートは結ばれる。

自らの過去を回想しながら提出されたりレポートを読んで、筆者にはそんな学生の心が伝わ



り、考えさせられてきてならないことがある。

宇宙人のレポート

精神分析学で高名な小此木啓吾先生は、著書「○○人間」シリーズの中で、現代人の心理構造を「宇宙人」に喩えて説明する。この宇宙人はUFOに乗っている時には巨大な力を発揮するが、一步UFOから降りるとヨチヨチ歩きの未熟児のようであった、という映画「未知との遭遇」の宇宙人を連想して使われている。つまり、小さい時からテレビ、冷暖房機、車、ラジカセ、ゲームマシン、テレビゲーム、電卓類の自動応答機械に取り囲まれ、ボタンひとつ押して操作することで自分の願望が叶うという場合が多く、周囲に機械のある間はボタン押し操作だけで自分のさまざまな欲求を満たし快適な生活を送っている。機械がなければ快を求め不快を避ける手段が身につけていないので、今の機械生活を失うまいとして、おびえた感情で保守化した生活意識に凝り固まる傾向にある。人間関係において、この宇宙人のような関わり方が身に付くと人の成熟にとって深刻な問題をひきおこす。母親に叱られると部屋へ引っ込んでラジオを聞く、あるいはリモコン玩具で遊んで自分を慰める。友達とけんかしてごたごたするよ

りは独りで機械を相手にする方が面白いというように、現実からの引きこもり現象が目立っていると云う。

今年の学祭プログラム最終頁に「不安、憂うつ、無感動、疑惑、陰謀、裏工作、停滞、混乱、ポーカーフェイス、空虚、混沌——私たちの時代」と書かれていた。この心境は「引きこもり」の心理機制が強まって起こるのではなからうか。

学生にとって日常事のレポート作成の機会に宇宙人のような物事との関わり方であってはつまらないと感ずる感覚を養ってはどうかであろうか。著者の語ることと響き合せて内面が吐露されているだけのレポートを読むと、学生の成し

たことは書物に目を通すというワンタッチ操作のみであり、それに引きずられて独り言を書いているにすぎない、これでは物足りない。学生自身の存在の粘り強さを読ませてもらいたい。レポートは真理に食い付いて考える力が取っ組み合いをしている舞台演技のひとつだと思ふ。学祭でバカ騒ぎをする心と同じ心になることができるのである。演技を終えて戻ってくるのは、ただの自分であるけれども「ただの自分」と「演ずる自分」との間を自由に往来できることが、自らの存在を確かなものにしていく力なのだから。

レポート・論文資料紹介

- 大学生と図書館 日本図書館研究会編 1981 (015-N71)
- レポート・論文のまとめ方と書き方 宮内克男著 川島書店 1969, 1974 (376.1-Mi86)
- 理科系の作文技術 木下是雄著 中央公論社 1981 (407-Ki46)
- 科学論文の書き方 改訂版 田中義彦, 田中潔著 裳華房 1963 (407-Ta84)
- 論文・レポートの書き方と作文技法 時事教育研究会編 緑園書房 1958 (816-J49)
- 大学生の作文・論文の基礎 陣ノ内宣男著 一ツ橋書店 1975 (816-J52)
- レポート・小論文・卒論の書き方 保坂弘司著 講談社 1978 (816.5-H91)
- 実例レポート論文の書き方 木村時夫著 南雲堂 1979 (816.5-Ki39)
- 論文・レポートの書き方 三浦修著 実業之日本社 1965 (816.5-Mi67)
- 論文をどう書くか 佐藤忠男著 講談社 1980 (816.5-Sa87)
- 博士・修士・卒業論文の書き方 佐藤孝一著 同文館 1973 (816.5-Sa87)
- 研究レポートのすすめ 杉原四郎著 有斐閣 1979 (816.5-Su34)
- 卒論・ゼミ論の書き方 早稲田大学出版部編 1976 (816.5-W41)
- MLA 新英語論文の手引 米国現代語学文学協会編 原田敬一訳 北星堂書店 1981 (836.5-B32)
- MLA 論文様式英語論文の手引 第2版 米国現代語学文学学会編 原田敬一訳 北星堂書店 1977 (836.5-Mo13)
- 英語論文作成法 岩山太次郎他編著 英宝社 1979 (836.5-E37)
- 英語論文とレポートの書き方 鳥居次好・宇山直亮著 英潮社 1976 (836.5-To67)
- 英米文学論文のまとめ方と書き方 成田成寿著 誠信書房 1963 (930.7-N52)
- 近代文学論文必携 岩城之徳他編 学燈社 1963 (910.26-I93)
- 国語国文レポートと卒業論文の方法 斎藤清衛編 右文書院 1963 (910.7-Sa25)
- 卒業論文のテーマと書き方 野町二著 研究社 1964, 1967, 1979 (930.7-N94)
- 論文・レポートの考え方と書き方 増補版 瀧川元男著 南雲堂 1979 (930.7-Ta71)
- 英文学「卒業論文」ガイド 内多毅著 英潮社 1978 (930.7-U14)

これらの資料は指定図書コーナーにあります。一夜貸出、一週間貸出のどちらもできます。

スペースの関係であげられませんが、洋書も何冊かあります。ご利用下さい。



調査・案内カウンター

最近の質問から

資料を検索するにあたって、その方法に行き詰ったり、疑問が生じた場合は、係員にお尋ね下さい。調査・案内カウンターでは、資料（図書・雑誌）が見つからないとき、これをさがしたり、あるテーマに関する図書や関係の文献をさがしたり、又これらの文献を所蔵している他の図書館をさがしたりして、皆さんのお手伝いをしています。

寄せられた質問のなかから、皆さんの日常の図書館利用にも参考になりそうなものを紹介しましょう。

平出修の「逆徒」という作品を読みたいのですが

まず目録カードを調べます。著者書名目録で「逆徒」(Gyakuto)を調べてみます。この作品は短編小説なので、カードはでてきませんでした。「平出修」(Hiraide, Shuu)で調べますと、『平出修集・正統』(春秋社 昭40-44)、『現代日本文学大系25』(筑摩書房 昭46)、『明治文学全集84』(筑摩書房 昭46)の目録カードがありました。『平出修集・正統』には収載されていますが、貸出中になっていました。2つの文学全集はカード上に作品名「逆徒」はでてきません。

そこで、文学全集に収載されている作家・作品を検索できる『現代日本文学総覧シリーズ』(日外アソシエーツ 昭57)(参考図書コーナー 910.26-N71)という最近刊行されたばかりの資料があります。これは、大正14年新潮社の『現代小説全集』から昭和56年に完結した『新潮現代文学』まで、主要な文学全集104種を収録範囲としています。①発行年代順に内容目次を収録した「全集・内容総覧」、②作家名のもとに作品名と収載されている全集名を検索できる「全集・作家名総覧」、③作品名のもとに作家名と収載されている全集名を検索できる



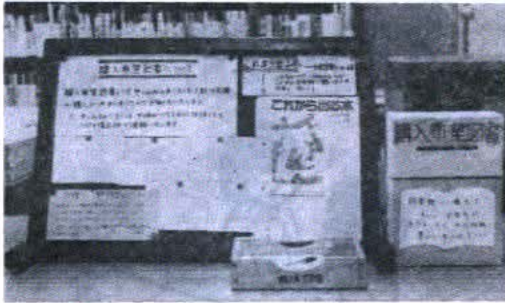
「全集・作品名総覧」から構成されています。現在①②が刊行されており、③も近々刊行の予定です。

ここで「全集・作家名総覧」で「平出修」の項をみますと、「逆徒」は、『現代日本小説大系30』(河出書房 昭27)、『現代日本文学全集84』(筑摩書房 昭46)、『日本文学全集10』(新潮社 昭39)、『日本現代文学全集105』(講談社 昭44)、『日本文学全集87』(集英社 昭44)、『日本の文学78』(中央公論社 昭45)、『現代日本文学大系25』(筑摩書房 昭46)などに収載されていることがわかります。目録カードにもどり、著者書名目録で調べますと、太字の4シリーズを所蔵していました。

この種の資料には『大阪府立図書館蔵近代日本文学合集索引』(昭48)(参考図書コーナー 910.26-069)、『明治・大正・昭和文学 作品総覧』(箱田文学研究会編・教育出版センター 昭52)(参考図書コーナー 910.26-H18)もあります。

なお、この他『日本近代文学大事典』など文学事典や、作家の研究書、書誌類からも調べることができます。

購入希望図書



調査案内カウンターの参考図書コーナーにあります

昭和56年度は、1年間で合計132件の購入希望図書の申込がありました。年々申込が増加しています。希望のあった図書については出来るだけ購入するようにしていますが、あまり個人の趣味や娯楽性が強いものについては購入をみあわせたものもあります。又すでに図書館に入っていたものもありました。下記の図書は、今年の4月～8月に申込があって購入されたものです。今後も皆さんからのたくさんの希望図書の申込があることを期待しています。

購入希望図書リスト ('82. 4 ~ 8)

- アンカー英和辞典 学習研究社 1981 (833-A49)
 越魅魍魎 宮原昭夫著 河出書房新社 1982
 (913.6-Mi73)
 知識の倫理 梶木 剛著 国文社 1974
 (910.26-Ka22)
 洞窟学入門 上野俊一・鹿島愛彦著 講談社 1978
 (460.7-U45)
 ドストエフスキーの青春 B. L. コマローヴィチ著
 みずす書房 1978 (983-D88k)
 不機嫌の時代 山崎正和著 新潮社 1976
 (910.26-Y48)
 服装から見た源氏物語 近藤富枝著 文化出版局
 1982 (913.36-Ko73)
 ガラスの結晶 渡辺淳一著 講談社 1979
 (913.6-W46)
 言語と神話 E. カッシーラ著 国文社 1981
 (134.8-C25)
 イラスト登山入門 横山厚夫絵・松村 充文 山と
 溪谷社 1981 (786-Y79)
 海外文通文集 石田幸太郎著 創元社 1981
 (836.6-I72)
 紙飛行機 中沢茂著 講談社 1982 (913.6-N46)
 微魂の小枝 辻 邦生著 中央公論社 1980
 (704-Ts41)
 化粧 上・下 渡辺淳一著 朝日新聞社 1982
 (913.6-W46)
 国語教科書攻撃と児童文学 日本児童文学協会編
 青木書店 1981 (375.9-N71)
 魔女的文学論 駒沢喜美著 三一書房 1982
 (904-Ko59)
The Moral Vision of Oscar Wilde. P. K.
 Cohen 著 Fairleigh Dickinson Univ. Press
 1978 (932.8-W73c)
 長崎ロシア遊女館 渡辺淳一著 講談社 1979
 (913.6-W46)
 女にとっての戦争 I, II 影山三郎他編 田畑書店
 1982 (915.9-O66)
 パリ行最終便 渡辺淳一著 河出書房新社 1972
 (913.6-W46)
 世界の思想家 E. デ・ボノ著 玉川大学出版部
 1982 (102-D52)
 四月の風見鶏 渡辺淳一著 文芸春秋社 1981
 (913.6-W46)
 聖徳太子1～ 梅原 猛著 小学館 1980～
 (289.1-Sh96u)
 戸塚刺繍作品集 全2巻 戸塚きく・戸塚貞子著
 啓佑社 1981 (594.2-To73)
 登山教室 全8巻 山と溪谷社 1981
 (786-To97)
 わたしの女神たち 渡辺淳一著 角川書店 1980
 (914.6-W46)
 わたしたちのギリシヤ人 K. ドーバー著 青土社
 1982 (231-D89)

宮沢賢治を卒業論文に選んだのは、賢治の童話が好きだったこともあるが、それよりも宮沢賢治という人間に興味をもったからだった。論文の構想をねっていた時も、文献を読みあさっていた時も、この人はいったいどういう人だったのだろうという疑問が、たえず私をせきたてていた。私は一方で賢治に魅了されていたが、反面、何故かふっきれないとまどいも抱いていたように思う。賢治はたくさんの顔をもっていた。詩人であり童話作家である芸術家としての賢治、法華経の熱烈な信者である宗教家としての賢治、農業技師である科学者としての賢治、そして農民の友としての賢治である。これらが生涯のある時期において強くあらわれたり、姿をひそませたりしながら、彼の中で混りあい、一つの人格を形造っていた。そして、これらの中のどの一つを除外しても、賢治を語ったことにはならない。この外にも、賢治は、音楽の合奏をしたり、エスペラント語を習ったり、演劇や舞踏にこっそりみたり、人造宝石をつくらうとしてみたりで、賢治の興味と関心はあらゆる方面に向った。あの短い生涯において、しかもたびたび病にたおれながら、どうしてこれだけのことをすることができたのかと不思議な気がする。賢治は多才だけでなく、多彩な人でもあったらしい。

私は、ずっと宮沢賢治という人を、才能に恵まれ、良質のユーモアと豊かな想像力と独創性をもち、多少気まぐれであるが、自分の理想や信念を行動に移していく実行力と不屈のバイタリティをもった人だと思っていた。そして実際そういう人であったが、作品を読み進めていくうちに、別の賢治像がうかびあがってきた。それは、意外にも孤独な賢治、多くの人と関り、人のために働き、身を碎きながら誰からも理解

されない賢治だった。写真でみる賢治の目は悲しげで、どこか遠くをみつめているようだ。はるかかなたにある青黒い空に人々の本当の幸福を求めたのか。

賢治の孤独は、童話の中にも美しい宝石のようにちりばめられている。例えば、『銀河鉄道の夜』、「カムパネルラ、僕たちいっしょに行こうねえ」というジョバンニの訴えに返事はない。また、地上からも、天上の星々からも拒絶されながらも絶望的な飛翔を続けなければならなかった『よだかの星』、賢治の童話中、最も

美しい叙情詩とっていいような『水仙月の四日』にさえ賢治の孤独をみることができ

る。孤独にもいろいろなかちがあるように思う。最も単純な、独りぼっちだという孤独、これは不安といいかえてもよく、対象さえあれば解消してしまう。

与えられることだけを待っている状態である。次に、人間はもともと孤独なものだと考えて、自分から外界との接触を絶ってしまうもの、こういう孤独は、静かな中に甘ささえもつ美的な孤独である。また、多少自棄的な場合もある。これらの孤独の中にある人は、自分も与えることもしないが、他から与えられることも望まない。そして、賢治のように、自分のしていることは幻影ではないかと疑いながらも、たえず自分から働きかけ、自分をつきくずしていかずにはおれない孤独がある。そこには結果としての孤独があるのではなく、行為全体が孤独な戦いなのだといえる。賢治の作品は鋭く澄みきって美しい。しかし、賢治が償った生命は、もっと美しかったのではないかと思う。

(カットも石田さんです)

私の中の賢治さん

石田瑞枝(国文助手)



ぶらうじんぐる〜む

学ぶことの尊さ

林 裕子

(家政科食物栄養コース1年)

私が、今までに織りなしてきた23年間という人生模様の中で、英文学を4年間学んだことは本当に尊いものであり誇りにすべきものであると思います。文学を学んだことは、決して実利的なものには結びつきはしませんが、私に学ぶことへの或る程度の手ほどきを与えてくれました。勉強は社会に出るまでの期間のものではないこと、大学を卒業したことが学ぶことにピリオドを打つことになるのではないということを教えてくれました。私を含め、私の友人達にとって卒業する際に、これからどのようにして自分なりに学ぶ姿勢を保つか一つの大きな課題でした。同時通訳を目指して東京の通訳養成校に入り直した友人、英語学校の講師として働きながら、翻訳の勉強をしている友人、そして留学試験にパスして、来春アメリカの大学院へ進学する予定の友人など皆、それぞれに大きな目標をもって、それに少しでも近づこうとして一步一步頑張っています。私は、コペルニクスの

大回転を試み、食物栄養科に再入学しました。この科は、栄養士になることを目的としているので化学に主として基礎を置いています。文学は、非常にとらえどころのない学問で全人格的なものが最も要求されますが、化学は正確さ、客観性を必要とします。全く異なる世界の学問の様に思えますが、結局は、文学にしる化学にしる、どんな学問でも人間に対して人生観あるいは世界観といったものの土台を作るのに手助けをしてくれるのではないかと思います。

学ぶことにおいて大切なことは、失敗しても立ち直れるだけの“flexibility”が必要であることでしょう。又、“continuation”も必要であると思います。確かに、将来結婚生活に入り、子育ての時期に勉強を続けることは無理であるかもしれませんが、1日に15分でも英会話を学ぼう、本を読もうという心構えが尊いものなのでしょう。生涯教育、それをなすにはとても困難なことに違いありませんが、私にとって、そして私の友人達にとっての大きな目標です。



書架整齊について

図書館では、利用者の皆さんが、求める本をすぐに探し出すことができる様に、毎朝、図書を並べ揃えています。利用の多い部門ではとてもそれだけでは間に合いません。

当館では、全開架式になっていますが、同時に皆さんが館内で閲覧した図書等は、ご自分で、もとの書架にもどしていただくことになっています。

本は分類番号順に並べられていますので、似かよった書名でも、全く異なる場所に置かれる場合があります。

書架から一度取り出した本は、必ず本のラベルの分類番号を確かめ、もとの正しい場所にもどすように、一人一人の方が心がけて下さることによって、本は一層探しやすくなります。

皆さんのご協力をお願いします。

蔵書点検について

図書館では、毎年、蔵書点検という作業を行っています。これは目録カードと本とを一点一点照合して、図書館の本が全て揃っているかどうかを調べるためのものです。

今年度は7月20日から8月2日までの2週間を費し、学生アルバイトの方10人の協力を得

私の蔵書点検体験記

森谷奈穂子（英文学科4年）

最後の夏休みは少しだけアルバイトをして、あとは論文を書こうかと軽い気持ちで蔵書整理の仕事に加わった。ところがどうしてどうして仕事はなかなかハードだった。作業内容はというと、要するに本が登録した通りにあるかどうかを調べるのである。図書館員と学生が一人づつペアを組み、一人が登録カードを読み上げ、もう一人がその本を確認して横に倒す。そしてその場所になかった本は貸出中か紛失かを調べるのである。貸出中でなかった本は必ずしも紛失したわけではない。この広い図書館中、一冊の本を探してあちらこちら歩き回るのである。閲覧室から書庫の中まで心当のある場所を限なく探す。洋書が和書の中に紛れ込んでいたり、大型資料のある所にひっそりと隠れていたりなど、見つけた時の喜びは大きい。さながら宝探しのようなものである。その様に一冊一冊確認しながら図書館の本すべてを倒していった。全十二万冊をである。本は以外と重い。始めの何冊かは楽に倒せるが、一時間もするとじわじわと腕にこたえてくる。事典類は言わずもがな。特に元体育研究室の部屋の本を調べる時はまるで暗くじめじめした炭鉱で採掘している様な気

分であった。と、苦しい体験ばかりを書いてきたが、決して辛いことだけではなかった。作業の最中にも時々珍しい本を見つけては驚いたり喜んだりした。ふだん自分に関係のある文学の所しか知らなかった私は、総記、自然科学、歴史、美術の



所を受け持ってみて、改めて実に様々な本があるなと感心せずにはいられなかった。正に図書館は知識の宝庫であるという事を実感したわけである。新しい紙の匂も好きだが、大正時代の茶色く古ぼけた本を開いた時の湿ったかびくさい匂も格別である。こういう本を手にとると不思議な感動が起こる。私などが生まれるよりも遙かに昔に書かれた本が、時を超えて今ここにあるのである。

色々な本を作業しながら目にする度、もっと本を読んでおけばよかった、せめて卒業まではどんどん図書館を利用しなければという思いにかられた。学生の皆さん、もっと図書館を知ろう。図書館を探险するつもりで来てみるのである。学問的なものでなくてもきっと何か意外な発見があるはずである。そうして自分自身の新しい世界が開けるかもしれない。

て、約12万3千冊の全図書を対象に点検を終えました。

この結果、ずいぶんたくさんの図書等が不明になっていることがわかりました。前回までの点検結果と比較してみても、今年度は多少増加しています。

この原因を考えてみますと、56年度より全開架式になった上、入退館における受付のチェックがなくなり、図書館への出入りが自由になったことが考えられます。

学生の皆さんにとっては、やかましい規制がなくなり、利用しやすくなったと好評だったこの方式ですが、紛失本が増えている現状をまの

あたりにしてみますと、館員一同、不安は隠しきれません。

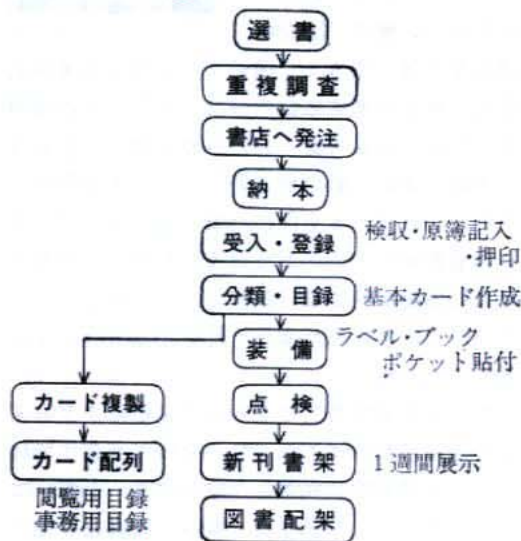
不明図書を分野別にみますと、文学、語学関係50%、栄養学、家政学関係23%、社会学関係13% e.t.c.と皆さんが日常、レポート提出や、ゼミの発表の際に頻繁に利用する資料が多いことがわかります。

本は図書館の貴重な財産であると同時に、皆さんの学習を助けるのに欠くことのできない大切な共有物なのです。

図書を館外帯出する場合には、必ずもう一度貸出の手続きを済ませたかどうかを確認してみましょう。

図書の流れ

書店に並んでいる新刊図書が、すぐ図書館に入らないのはなぜかしら。——こんな疑問をあなたはおもちではないですか。今回は、図書館で図書を購入した場合、どのような経路を経てみなさんが利用できるようになるのかを、図によって示してみました。



ほとんどの図書は、上の図のような一連の流れを経て初めて閲覧室に並ぶのです。みなさんの目には触れない様々な作業が必要なこと、おわかりいただけるかと思います。こうして、図書館では、年間約7,000冊、月平均580冊の図書を受入ています。これからも、図書をできるだけ早くみなさんの利用に供せるよう努力していきたいと考えています。

編集後記

録から黄へ、そしてやがては真白な世界に……窓から眺める自然の風景は、ときの移りを知らせてくれます。みなさんは、冬休みが待ち通しい頃。卒業論文に

とりくむみなさんは、最後のおいこみの頃でしょうか。わずか14ページのこの図書館だよりでも、あれこれ頭を悩ませ、こうしてでき上がった時はほっとするというのが実感です。

NEWS.....

❖ 冬休みの予定 ❖

例年どおり12月16日から1月14日まで休日開館となります。この間、年末年始の休館が2週間あります。詳しくは掲示板でお知らせします。(休日開館 午前9時30分～午後4時)

❖ 閲覧室の配置が変わりました ❖

10月の閉館時に、目録カードケース、新着雑誌コーナー、指定図書コーナーなど閲覧室の配置を大幅に変更し、書架を増設しました。館内のあちこちに配置図を置いてあります。

❖ 返却ポストを設置しました ❖

9月から閲覧室の入口に返却ポストを設けました。図書館閉館時の返却にご利用下さい。

❖ 藤関係の資料を集めています ❖

本学に関する資料を集めています。同人誌、研究会誌、部報、新聞など発行しましたら図書館に1部寄贈して下さい。



藤女子大学
藤女子短期大学

図書館だより

第16号 1982. 12. 1. 発行

発行者 札幌市北区北16条西2丁目 藤女子大学図書館

印刷者 札幌市東区伏古8条2丁目 天使院印刷製本部